連続講座「国民国家と多文化社会」第10シリーズ

文化接合の島：台　湾

第1回／11月10日（金）

報　　告：丸山　　勝（目白大学）

「台湾の政治と文化―本土意識が生み出したもの」

コメンテーター：清河　雅孝（京都産業大学）

第2回／11月17日（金）

報　　告：森口　恒一（静岡大学）＋垂水　千恵（横浜国立大学）

「台湾の言語状況と文学」

コメンテーター：西　　成彦（立命館大学文学部）

第3回／11月24日（金）

報　　告：星名　宏修（琉球大学）

「現代中国文学研究における台湾文学研究」

コメンテーター：宇野木　洋（立命館大学法学部）

岡田　英樹（立命館大学文学部）

第4回／12月1日（金）

報　　告：田村志津枝（評論家）

「台湾・多文化社会と映画」

コメンテーター：原　　毅彦（立命館大学国際関係学部）

第5回／12月8日（金）

報　　告：丸川　哲史（評論家）

「台湾のポストコロニアル状況と文化生産」

コメンテーター：宗田　昌人（京都大学・院生）

上村ゆう美（お茶の水女子大学・院生）

場所：立命館大学アカデメイア立命21　K209会議室

時間：16：30～19：30

文化接合の島：台　湾

第9シリーズの「沖縄」に次いで，このシリーズでは「台湾」を探究目標にしたい。立命館大学国際言語文化研究所では，1994年に「台湾の現代化をめぐって——台湾植民地統治百年にあたって」と題するシンポジウムを国際地域研究所と合同で，また1996年には「多文化主義・多言語主義の現在——国民国家の臨界？」と題するシンポジウムに陳光興氏を招くなどしてきたが，今回は「沖縄」の目と鼻の先でありながら，確実に「日本」の「外」に置かれている島としての「台湾」に対して，かつての植民地主義とは違ったやり方で，その「台湾問題」をそのまま私たちの問題としても捉えうる回路をさぐりたい。

1994年のシンポジウムから6年，台湾をとりまく政治状況は推移し，また日本における過去の植民地主義の50年をめぐる歴史研究の状況も新しい展開を見せはじめている。台湾中部地震によって，台湾の見えなかった一部がテレビカメラを通して浮かび上がるという現実にも，ついこのあいだ私たちは遭遇したばかりだ。

「台湾」は「日本」からは消滅したかに見える「多様な先住民」の存在がいまなお可視的であるばかりか，ひょっとしたらそれが「新台湾人」にとってのアイデンティティーの，柱のひとつでさえありうるかもしれない。また西洋植民地主義や，中国大陸から断続的な移民・難民・亡命者の存在が同じく可視的な場所である。その文化混交の厚みは，カリブ海世界をさえ凌ぐほどであり，日本による植民地統治の痕跡も生々しく，言ってみれば，重層的な植民地主義の「生きた博物館」のようである。

私たちは中南米やアンチル諸島をヨーロッパや北米諸国との関係の中で見るように，もう一度，「台湾」を多方面から捉え直してみたい。それは，「日本」もまたそうであったかもしれない場所として「台湾」を見るということでもある。